日本文学全集

11

謡曲狂言
歌舞伎集

日本文学全集 11

謡曲狂言集
歌舞伎

河出書房新社

日本文学全集11　謡曲狂言歌舞伎集

© 1961

編集委員
青野季吉　荒　正人
川端康成　瀬沼茂樹
中島健蔵

装幀者
原　　弘

N D C

昭和36年4月5日初版印刷
昭和36年4月10日初版発行

定価　290円

訳者代表　戸板康二
発行者　河出孝雄
印刷者　中内佐光
印　刷　暁印刷株式会社
製　本　岸田製本紙工業株式会社
本文用紙　王子製紙工業株式会社
同納入　株式会社大和屋洋紙店
クロース　日本クロス工業株式会社
同納入　株式会社小島洋紙店

発行所　東京都千代田区神田小川町三の八　株式会社　河出書房新社
電話東京(291)3721～7
振替口座東京10802

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

目次

謡曲……一
狂言……一七
歌舞伎……三七
注釈……池田弥三郎　四六
解説……横道万里雄　戸板康二　四五

謠

曲

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

夢幻能

高砂……三
清経……一一
野宮……一九
松風……二六
檜垣……三六
藤戸……四三
綾鼓……五一
葵上……五六
鵜飼……六四
猩々……七一

現在能

湯谷……七三
三井寺……八一
隅田川……九三
卒塔婆小町……一〇二
邯鄲……一一二
望月……一一九
景清……一二八
安宅……一三七
谷行……一五〇
船弁慶……一六〇

高砂*

喜多流による

世阿弥元清作
田中千禾夫訳

人物　友成（神主）（ワキ）
従者（ワキヅレ）
姥（高砂明神の化身）（ツレ）
翁（住吉明神の化身）（前シテ）
住吉明神（後シテ）

時　春
所　前・播磨国高砂
後・摂津国住吉

一

友成・従者　こんどがはじめての旅だ。こんどがはじめての旅だ。日もたって先が長いことだな。日も行く末ぞ久しき友成　ええ、ここにいるのは九州肥後の国阿蘇神社の神主、友成と申す者。まだ京都を見たことがないので、こんど、思い立って上京するところ。また、よいついでだから播州高砂の浦も見物したいと思う。

今を始めの旅衣
今を始めの旅衣

友成・従者　旅の装での終着ははるかの京都、終着ははるかの京都、今日こそと思い立って港を出て、船路はのんびりと春風。幾日たったのか、前のこともあとのこともさあわからないほどはるばるとあんなに遠いと思った播磨の入江高砂の浦に着いた*わい。高砂の浦に着いたわい。

旅衣
末遙々の都路を
末遙々の都路を
今日思ひ立つ浦の波
船路長閑けき春風の
幾日来ぬらん跡末も
いさ白雲の遙々と
さしも思ひし播磨潟
高砂の浦に着きにけり
高砂の浦に着きにけり

二

（姥を先にして、翁と姥橋掛りに登場）

翁・姥　春風が高砂の松に吹いて日は暮れた。丘の上の夕の鐘も鳴っているな。

姥　かすんでるので岸辺の波は

高砂の
松の春風吹き暮れて
尾上の鐘も響くなり
波は霞の磯隠れ

見えず、
翁・姥　音だけだ。潮の満干で音がちがう。
（二人は舞台に入る）
翁　誰も知り合いがなくなってしまったな。
松も昔から知っている友ではない。
翁・姥　過ごしてきた長い世はしらない、
頭には白雪が積もって老いの鶴だ。
その巣では夜が明けるのに月が残り、
霜が降る春の夜の寒々とした暮らしにも、
松風の音ばかり聞きなれて、
和歌にたよって慰めているばかりだ。
訪客は松に話しかける浦の風
風に落された葉のついた衣の袖といっしょに
木陰の塵をかいて清めようよ。

音こそ潮の満干なれ
誰をかも
知る人にせん高砂の
松も昔の友ならで
過ぎこし世々は白雪の
積り積りて老の鶴の
堵に残る有明の
春の霜夜の起居にも
松風をのみ聞き馴れて
心を友と菅蓆の
思ひをのぶるばかりなり
音づれは
松に言問ふ浦風の
落葉衣の袖添へて
木蔭の塵を掻かうよ

木陰の塵をかいて清めようよ。
ここは名も高砂、ここは名も高砂、
丘の上の松は年をとり、
老いの波も寄せて来る。わたくしたちも
木の下かげの落ち葉をかくが、
かくなるまで命をながらえて、共になおいつまでか生きようという松。
それも前からよく聞いた話の松。
それも前からよく聞いた話の松。

木蔭の塵を掻かうよ
所は高砂の
所は高砂の
尾上の松も年古りて
老の波も寄り来るや
木の下蔭の落葉かく
なるまで命存らへて
猶いつまでか生きの松
それも久しき例かな
それも久しき例かな

三

友成　あの、そこのお年寄りに尋ねたいことがあります。
翁　わたくしのことでございますか。なんでございましょう。
友成　ここで、高砂の松とはどの木のことを言うのでしょうか。
翁　そうでございますね、高砂の松とは中でもこの松のことを言うことになっております。

友成　ところで、高砂の住の江の松を相生の松と名づけてありますが、ここと住の江とは国が離れているのに、どうして相生の松と言うのでございますか。

翁　それはですね、古今集の序文に*「高砂と住の江の松も相生のやうに思はれて」とあります。爺はあの住の江の者、姥こそ、この土地の人（姥に）、だから知ってることがあったらお言いなさい。

友成　不思議ですね、見たところ年よりの夫婦がおそろいでいられるのに、遠い住の江とこの高砂と、入江や山国を隔てて住んでいるというのはどういうわけでしょうね。

姥　おもしろくないことをおっしゃる。山や川が中にあって万里を隔てても、互いにおもいは通じ合うもの。夫婦の仲の道は遠くはございません。

翁　まず考えてもごらんなさい。

不思議や見れば老人の夫婦一所に在りながら遠き住の江高砂の浦山国を隔てゝ住むといふは如何なる事やらん

うたての仰せ候や山川万里を隔つれども互ひに通ふ心遣ひの妹背の道は遠からず

まづ案じても御覧ぜよ

翁・姥　高砂松、住の江松、松という感情のない物でさえ、相生の名はあるものでございます。まして生命のある人間として、久しい間、住の江から通いなれた爺と姥は松といっしょにこの年になるまで、相生の夫婦でいるのもあたりまえ。

友成　わけを聞けばおもしろいことですね。では、前にお聞きした相生の松の物語で、この土地で伝えている説はありませんか。

翁　昔の人の言い伝えで、めでたい代のたとえ話がございます。

姥　高砂と言いますのは、上代の

高砂住の江の松は非情の物だにも相生の名は有るぞかしましてや生有る人として年久しくも住吉より通ひ馴れたる尉と姥は松諸共にこの年まで相生の夫婦となるものを

謂はれを聞けば面白やさて〳〵先に聞えつる相生の松の物語所に聞き置く謂はれは無きか

昔の人の申しゝはこれはめでたき代の譬なり

高砂といふは上代の

万葉集の昔ということ。*

翁　住吉と言いますのは、今、この御代にあたらせられる延喜の天皇の御事。

姥　松とは、万葉集古今集と昔も今も、言の葉の栄えが尽きないように、

翁・姥　栄える御代をあがめるたとえの話です。

友成　なるほど、ありがたい話ですね。今こそ疑問が晴れた春の日で、

翁・姥　光はやさしく播磨の海を照らし、

姥　あすこは住の江、

翁・姥　ここは高砂、

姥　松も色をまし、

翁・姥　春も

翁・姥　のどかで

地謡　四方の海の波は静かに国も治まり、

このときにふさわしい風が吹くのもしずかな平和の御代だな。

そこにめぐり合わした相生の松こそめでたいなあ。

ほんとに仰いで何も言うことがないこのような世の中に、住んでいる民としてやはり豊かな天皇の恵みはありがたいものだ。

天皇の恵みはありがたいものだ。

万葉集の古の義

住吉と申すは

今この御代に住み給ふ

延喜の御事

松とは尽きぬ言の葉の

栄えは古今相同じと

御代を崇むる譬なり

よく〳〵聞けば有難や

今こそ不審春の日の

光和ぐ西の海の

かしこは住の江

こゝは高砂

松も色添ひ

春も

長閑に

四海波静かにて

国も治まる時つ風

枝を鳴らさぬ御代なれ

や

あひに相生の

松こそめでたかりけれ

げにや仰ぎても

事も愚かやかゝる世に

住める民とて豊かなる

君の恵みは有難や

君の恵みは有難や

四

友成　もっと高砂の松のめでたいわけをくわしく言ってください。

翁　ていねいにお話しすることにいたします。

地謡　そら、草木には心がないなどと言いますが、

咲くとき実るときをまちがえず、

太陽の春には働きだして

南の枝の花がまず開きます。

それ草木心無しとは申せども

花実の時を違へず

陽春の徳を具へて

南枝花始めて開く

翁　しかしながらこの松はそのあらわれはいつも変わらず、花の時、葉の時とわかれていず、

地謡　四季がめぐって来ても、千年そのままの色が雪の中に濃く、花は百を十倍の千年に一度咲くともいいます。

翁　こんな因縁を持つ松、その枝の

地謡　葉、草、露の玉、すべて言葉の美しさをみがくもととなり、生きているあらゆるものがそれぞれに、敷島の和歌のおかげを受けようとするそうですね。

ところで藤原長能の言葉にも、心のあるものもないものも、その声は皆、歌にならぬものはない。

然れどもこの松はその気色とこしなへにして花葉時を分かず
四つの時至りても一千年の色雪の中に深く
又は松花の色十かへりともいへり
かゝる便りを松が枝の
言の葉草の露の玉心を磨く種となりて
生きとし生ける物毎に敷島の陰に寄るとかや
然るに長能が言葉にも有情非情のその声皆歌に洩るゝ事無し

草、木、土砂、風の声、水の音まで、すべて、何か物をこめる心がある。

春の林が東の風に動き、秋の虫が北の露で鳴くのも、皆、和歌らしい姿ではないか、と。

中でもこの松というものは、十八公*という公爵の気品、千年の緑をたもち、昔と今とで色が変わらず、始皇*がその下に嵐を避け得た功により、爵位を授けられたほどの木だといって、異なる国でも日の本の国でも、あらゆる民がこれをもてはやす。

翁　高砂の丘の上の鐘の音がしていますね。

地謡　暁にかけて霜はかかるけれど、

草木土砂風声水音まで万物を籠むる心あり
春の林の東風に動き秋の虫の北露に鳴くも
皆和歌の姿ならずや
中にもこの松は万木に勝れて十八公のよそほひ
千秋の緑をなして古今の色を見す
始皇の御爵に預かる程の木なりとて
異国にも本朝にも万民これを賞翫す
高砂の尾上の鐘の音すなり暁かけて

试读结束：需要全本请在线购买： www.erto

松の枝の葉の色はやはり深緑で、
木陰に寄って朝に夕に
いくらかいても落ち葉が尽きないのは、
たとえば「松の葉は散り失せずして一色はなおさら失せず、
直拆の葛のように長くつづく世のことである、というのはまったくだ。
そうたとえられる常緑樹の中でも名も高い高砂の松は、
末代までの珍しい話として、
相たがいに生えている影が、
消えることはないのです。

霜は置けども松が枝の葉色は同じ深緑
立寄る蔭の朝夕に
掻けども落葉の尽きせぬは
真なり松の葉の
散り失せずして色は猶
真拆の葛永き代の
譬なりけり常磐木の
中にも名は高砂の
末代の例にも
相生の影ぞ久しき

五

地謡　ほんとに名の高い松が枝の、
ほんとに名の高い松の枝のように、
年老いた木の素性を明かして、
その名を名のってくださいよ。

翁・姥　今となっては包みかくしはいたしません。
ここにいるのは高砂住の江の神、
ここにそろいの夫婦として
姿を見せているのです。
地謡　不思議だ、それでは名所の
松の奇跡があらわれたのか。
翁・姥　草や木には心はないものですが
地謡　尊い御代というので、
翁・姥　土も木も、
地謡　わが大君の国のものだから、
いつまでも君が代をとばかり……
住吉に先に行って
あすこで待っておりましょう
と言い、
夕波が寄せる岸べの
漁夫の小舟に乗って、
追い風にまかせて

げに名にしおふ松が枝の
げに名にしおふ松が枝の
老木の昔現して
その名を名宣り給へや

今は何をか包むべき
これは高砂住の江の
神こゝに相生の
夫婦と現じ来りたり
不思議やさては名所の
松の奇特を顕して
草木心無けれども
畏き代とて
土も木も
我が大君の国なれば
いつまでも君が代の
住吉にまづ行きて
あれにて待ち申さんと
夕波の汀なる
蜑の小舟に打ち乗りて
追風に任せつゝ

沖のほうへ出てしまったぞ。
沖のほうに出てしまった。
（翁とつづいて姥退場）

沖の方へ出でにけりや
沖の方へ出でにけり

六

友成・従者　高砂の、その浦の
舟に帆をあげて、
その浦の舟に帆をあげて、
月の出と共に汐も出る舟も出
ると、
波の泡も立って淡路の島影が
遠くなる鳴尾の沖を過ぎ、
早くも住の江に着きました。
早くも住の江に着きました。

高砂や
この浦船に帆を揚げて
この浦船に帆を揚げて
月諸共に出で潮の
波の淡路の島影や
遠く鳴尾の沖過ぎて
はや住の江に着きにけ
り
はや住の江に着きにけ
り

七

（住吉明神があらわれる）
住吉明神　自分が見始めてから
もずいぶんになるから
住吉の岸の姫松は何代たって
いるだろう、と仰せられたの

我見ても
久しくなりぬ住吉の
岸の姫松幾代経ぬらん

陛下とむつまじいことを
御存じないのですか、久しい
前から代々お祝いしておりま
した。
とお答えしたように、神楽を
あげ
夜の鼓の拍子をそろえ、
楽しませておくれ、神主たち
よ。
地謡　西の海九州の檍が原*の波
間から
住吉明神　あらわれ出た住吉の
神である。
春になって雪が消えかかる浅
香潟。
地謡　藻を採っている岸べの
住吉明神　松の根にかけて腰を
さすると、
地謡　千年変わらぬ緑が手いっ
ぱいにひろがり、
住吉明神　梅の花を折って頭に
さすと、

睦ましと
君は知らずや瑞垣の
久しき夜々の神神楽
夜の鼓の拍子を揃へて
すゞしめ給へ宮づこたち
西の海
檍が原の波間より
現れ出でし住吉の
春なれや
残んの雪の浅香潟
玉藻刈るなる岸陰の
松根に倚つて腰を摩れば
千年の翠
手に満てり
梅花を折つて頭に挿せば

地謡　二月の雪が衣にこぼれる。二月の雪衣に落つ

八

（明神は音楽に合わせて舞を舞う）

地謡　ありがたの降現、
ありがたの降現、
月は澄む住吉の神のお遊び、
お姿を拝む神威のあきらかさ。
住吉明神　ほんとにさまざまの
舞姫の声が澄んで聞こえるよう。
住の江の松の影が波にうつるのは、
美しい青海波の舞楽というところか。
地謡　神と大君との道はすぐつながり、
すぐに都の春に間に合うとしたら、
住吉明神　それこそ還城楽を舞おう。
地謡　万歳楽では
住吉明神　小忌衣を着て、

有難の影向や
有難の影向や
月住吉の神遊
御影を拝むあらたさよ
げに様々の舞姫の
声も澄むなり住の江の
松影も映るなる
青海波とはこれやらん
神と君との道直に
都の春に行くべくは
それぞ還城楽の舞
さて万歳の小忌衣

地謡　舞のさす腕で悪魔を払い、
ひく手では長命の福を抱き、
千秋楽では民を愛し
万歳楽では命を延ばそう。
相生の松に吹く風、
さあっさあっと舞って楽しもう。
さあっさあっと舞って楽しもう。

さす腕には
悪魔を攘ひ
斂むる手には
寿福を抱き
千秋楽は民を撫で
万歳楽には命を延ぶ
相生の松風
颯々の声ぞ楽しむ
颯々の声ぞ楽しむ

清経*

宝生流による

世阿弥元清作
窪田啓作訳

人物　左中将清経（シテ）
　　清経の妻（ツレ）
　　淡津の三郎（ワキ）
時　秋
所　京都

一

（淡津の三郎が登場）

三郎　八重の汐路の波を越えて、いざや都へ帰ろう。

八重の汐路の浦の波
八重の汐路の浦の波
九重にいざや帰らん

これは左中将清経の御内につかえ申す、淡津の三郎と申す者。さてもたよりに申した清経殿は、さる筑紫の戦に負けたもうて、都へはとても帰れぬ身の上、路傍の雑兵の手にかかるよりは、と決心なさったのか、豊前の国柳が浦の沖で、月の明るい夜ふけ舟から身を投げてむなしくなりたもうた。また船の中を見ると、お形見に鬢の髪を残し置かれたので、お形見を持ち、ただ今都へのぼる。

このほどは鄙の住まいに慣れ慣れて、たまたま帰る故郷の都も、はでやかな昔の春にひきかえて、今はものうい秋の暮れ、はや旅衣には時雨が降る。雨にぬれ、涙にぬれた袖に、落ちぶれた身をつつみ、忍び忍びに京へのぼる。急いだのでもう都へ着いた。

鄙の住居になれ〳〵て
たま〳〵帰る故郷の
昔の春に引きかへて
今は物憂き秋暮れて
はや時雨ふる旅衣
しをるゝ袖の身のはて
を
忍び〳〵に上りけり
忍び〳〵に上りけり

二

（三郎がワキ座にいる清経の妻の前に出ると、場面は清経の留守宅となる）

三郎　いかに案内を願います。筑紫より淡津の三郎が参りました。どうかおとりつぎください。

清経の妻　なに、淡津の三郎というか。ああ珍しい。とりつぎの手をふるまでもない。こちらへおいでください。

三郎　や、これはあのかたのお声らしい。淡津の三郎が参りました。

清経の妻　さて今はなんのためのお使いか？

三郎　それをこれこれと申しあげるためここまで参りましたが、なんと申しあげましょうか、どうしたらよい

かわかりません。

清経の妻　不思議なこと。どうしてものも申さずに、さめざめと泣くのか。

三郎　面目もないお使いに参りました。

清経の妻　面目もないお使いとは？　御出家でもなさったのか？

三郎　いや、御出家なさったのではございません。

清経の妻　過ぎた筑紫の戦にも御無事だったと聞いているが。

三郎　はい、過ぎた筑紫の戦にも御無事でございましたが、清経殿のお心は、都へはとても帰れぬ身の上、路傍の雑兵の手にかかるよりは、と御決心なさったのか、豊前の国柳が浦の沖で、月の明るい夜ふけ、舟から身を投げて、おなくなりになりました。

清経の妻　なに、身を投げてむなしくなられたと言うのか。

ああ恨めしい。せめては戦に討たれたとか、または病でなくなられたというなら、いたしかたないとも思うのだが、われと身を投げたもうのは、あの約束も偽りであったのか。まこと恨んでもそのかいもなく、あの人がなくなったのが悲しい。

地謡　何事もはかない世の中、このごろは人目を忍ぶわが家の、垣根の薄を吹く風が音を立てぬように、声をも立てず忍び音に泣くばかりの身であったが、今はもう誰をはばかることがあろう。有明の月の残る夜もすがら、何を忍びかくれよう。時鳥さながら、なおも清経の妻と明らかに名のって泣き明かそう。

なに身を投げむなしくなり給ひたるとや
恨めしや
せめては討たれもしは
又
病の床の露とも消えなば
力なしとも思ふべきに
我と身を投げ給ふ事
偽りなりつるかねことかな
げに恨みてもそのかひの
なき世となるこそ悲しけれ
何事もはかなかりける世の中の
この程は
人目をつゝむ我が宿の
人目をつゝむ我が宿の
垣ほの薄吹く風の
声をもたてず忍び音に
なくのみなりし身なれども
今は誰をか憚りの
有明月の夜たゞとも
何か忍ばん子規
名をもかくさで鳴く音かな
名をもかくさで鳴く音かな

三

三郎　また船中を見ますと、お形見に鬢の髪を残し置かれました。これを御覧になってお心をお慰めください。

清経の妻　これは中将殿の黒髪か。見れば目もくらみ胸迫り、なおも思いはつのる。見るたびに心の苦しむ髪だから、つらさのあまりもとの主に返すと、

地謡　形見の髪を清経殿にお返しして、夜もすがら涙とともに人をしのび、夢になりともあらわれたまえと、寝られずにいると、枕が夫の魂にわがおもいを知らせてくれよう。

これは中将殿の黒髪かや	見れば目もくれ心消え猶も思ひのまさるぞや見るたびに心づくしのかみなればうさにぞかへす本の社と
手向返して夜もすがら涙と共に思ひ寝の夢になりとも見え給へと	寝られぬにかたむくる枕や恋を知らすらん枕や恋を知らすらん

四

（清経が登場する。清経は妻の夢のなかに現われるのだから、前の地謡のうちにすでに静かに出て舞台に入る）

清経　聖人は心平らかで夢を見ないという。しかしこの世はしょせん一つの夢、誰がこの世を実在と見よう。目の中に迷いの塵があれば三界も狭く見え、心にわだかまりがなければ、小さい一つの床も広く思われる。まことに憂しと見る世も夢、つらしと思うも幻、いずれも跡形のないことは雲・水のゆききのよう。その娑婆の故郷にたどり来ては、また帰り行く、わが心のはかないこと。うたた寝に恋しい人を見てから、*夢というものを頼みに思いはじめた。

聖人に夢なし誰あつて現と見る眼裏に塵あつて三界窄く心頭無事にして一床寛し	げにや憂しと見し世も夢つらしと思ふも幻のいづれ跡ある雲水の行くも帰るも閻浮の故郷にたどる心のはかなさようたゝ寝に恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき

五

清経　なつかしい妻よ、清経が参ったぞ。

いかにいにしへ人清経こそ来りて候へ	

试读结束：需要全本请在线购买： www.erto